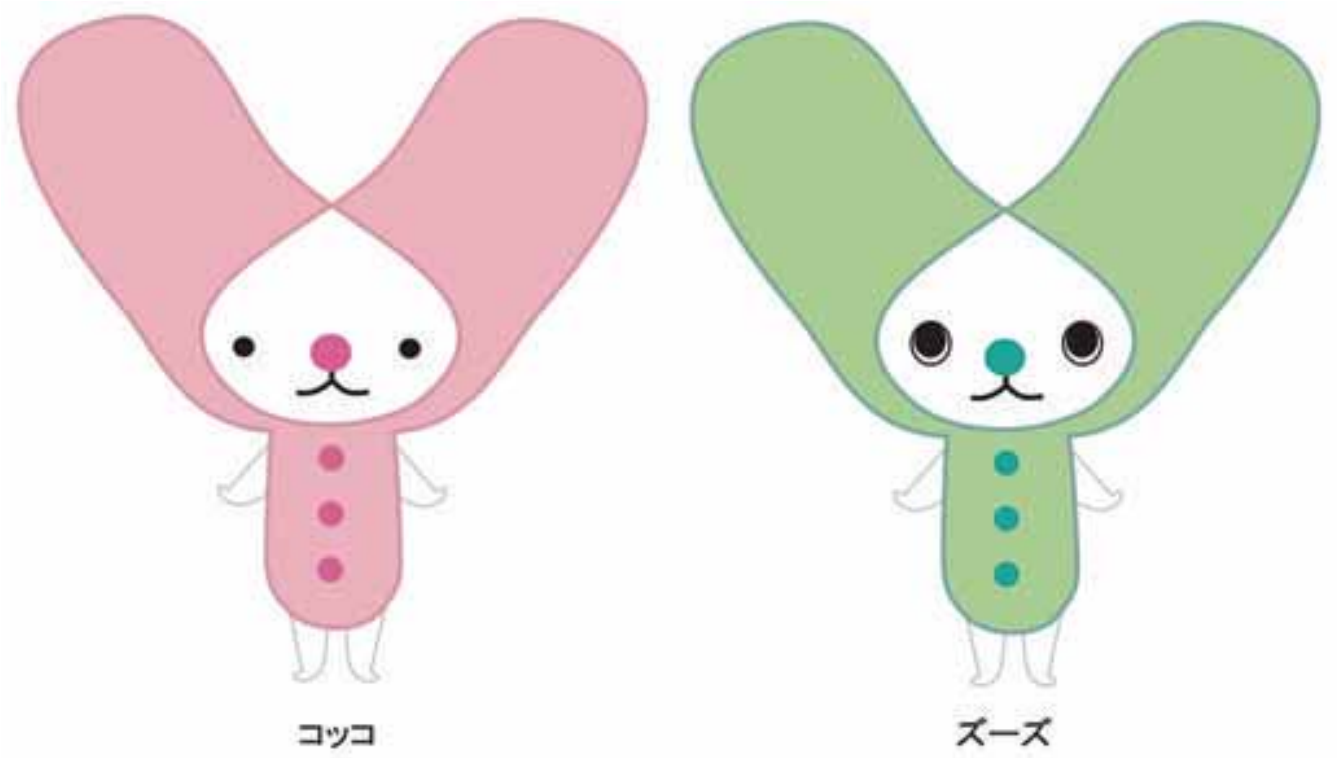
いのちの贈りもの

～骨髄バンクドナー登録でできること～



三重県

© Japan Marrow Donor Program. All Rights Reserved.

「いのちの贈りもの」目次

1. 「いのちの贈りもの」の発行にあたって ……1
2. 応援の声 ……4
3. 骨髄移植経験者の声 ……8
4. 骨髄ドナー経験者の声……13
5. 医療従事者の声……14
6. ボランティアの声……16
7. 骨髄・末梢血幹細胞提供までの流れ……18
8. 骨髄バンクドナー登録について……20
9. Q＆A……21
10. 三重県骨髄バンク推進連絡協議会（勇気の会）……24
11. 三重県赤十字血液センターから……26
12. 公益財団法人日本骨髄バンクのあゆみ……28
13. ドナー登録窓口・お問い合わせ先……29

三重大学医学部附属病院（津市）

「いのちの贈りもの」の発行にあたって

三重県医療保健部薬務感染症対策課
課長 下尾　貴宏

平素は、本県の骨髄バンク事業に格別の御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

骨髄バンク事業は、平成４年に開始され、これまでに非血縁者間において、全国の累計で22,704件（平成30年12月末日現在）の骨髄移植が実施されています。また、平成26年1月には、関係機関の責務等を明らかにするとともに、移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進を図り、造血幹細胞移植の円滑かつ適正な実施を目指して、「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」が施行されたところです。

本県においては、県内の関係機関と協働し、骨髄バンクに関する普及啓発やドナー登録者の確保に努めてまいりましたが、少子高齢化の影響もあって、平成27年度からは３年連続で骨髄ドナー登録者数が減少しており、骨髄提供を必要とする患者さんに必要な骨髄を届ける骨髄バンク事業の維持の面から、憂慮すべき事態に直面しています。

このような状況を受け、本県では、県、市町、三重県赤十字血液センター、ボランティア団体等が集い、骨髄バンク事業の推進に向けた情報交換や協議を行う場である「三重県骨髄提供の環境向上委員会」を設立いたしました。今後は、当委員会を通じて、各関係機関が密に連携を図り、これまで以上に、骨髄バンクにかかる普及啓発や、県内におけるドナー登録者の確保を推し進めてまいります。

本冊子の発行にあたっては、実際に骨髄提供を受けた患者さんや、骨髄を提供された方などから多くの寄稿をいただきました。本冊子を手に取られたみなさまにおかれましては、実体験を踏まえた声を感じ取っていただき、骨髄バンクについて考えていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりますが、この冊子は「骨髄バンクの普及啓発用チラシ等作成のためのクラウドファンディング」（平成30年度）により集められた善意の寄附金によって作成させていただいたものです。この場をお借りして、ご寄附をいただいたみなさまに厚く御礼申し上げます。

「いのちの贈りもの」の発行にあたって

三重県骨髄バンク推進連絡協議会（勇気の会）
会長　南　信行

昭和47年（1972年）、三重大学医学部附属病院血液内科に入局した当時は、「白血病や重症再生不良性貧血」は「不治の病い」であり、患者さんには「本当の病名」を告げることができず、「骨髄機能低下症」という病名を付け、苦しい説明をしていた時代でした。

昭和50年代に入り、成分輸血が可能な「連続血球分離装置」や感染防御のための「無菌病室」が導入され、血液難病に対する治療が新たな時代へと入って行きました。そして、

昭和59年（1984年）3月、三重大学医学部附属病院血液内科で初めて「重症再生不良性貧血」患者さんへの血縁者間骨髄移植（患者さんのお姉さんからの骨髄提供）が行われました。移植は成功し、移植後３週間位で正常造血の回復が確認できました。しかし、残念ながら患者さんは、移植関連のサイトメガロウイルス感染症を併発して、移植後６か月で亡くなられてしまいました。この尊い患者さんの経験から、骨髄移植への機運が一気に高まりました。しかし、骨髄移植のためには、「HLA（ヒト白血球抗原）一致のドナー（提供者）が居る」ことが不可欠です。兄弟姉妹が４人以上であれば、HLA一致のドナーが見つかると言われていますが、少子時代の今日では兄弟姉妹間でドナーを見出すことは極めて困難です。また、非血縁者からHLA一致のドナーが見つかる確率は、数百人～数万人に一人です。

昭和63年（1988年）、県職員の娘さんが「血液難病」を発症し、その仲間達が「娘さんを救おう！」と「骨髄提供者探し」に立ち上がりました。そして、

同年（1988年）12月、患者さん家族・県職員の方々が中心になって「三重県骨髄献血希望者を募る会」が発足しました。

平成元年（1989年）、すでに民間で、「骨髄提供者探し」を精力的に行っていた愛知県の団体が「東海骨髄バンク」を設立されました。私達「三重県骨髄献血希望者を募る会」も参画させて頂きました。

平成４年（1992年）、「三重県骨髄献血希望者を募る会」を「勇気の会（現在の三重県骨髄バンク推進連絡協議会）」に組織変更し、活動を続けています。その当時、「骨髄提供者探し」は全国的な広がりを見せ、ついに

平成３年(1991年)12月、「財団法人骨髄移植推進財団」の設立が認可され、現在の「日本骨髄バンク」が発足しました。そして、

平成４年(1992年)１月、「ドナー登録」の受付が開始され、

平成５年(1993年)１月、日本骨髄バンクによる初の骨髄移植が実施されました。

その後も骨髄バンクを介しての骨髄移植数(最近は造血幹細胞移植という)は増え続け、最近では、１か月に100人位の患者さんが造血幹細胞移植を受けています。

全国的な骨髄バンク運動は、発足当時マスコミにも度々取り上げられ、芸能人・スポーツ選手などの応援も得て、発展し続けて来ました。しかし、最近では、マスコミにも取り上げられることも少なくなり、国民の関心も低下してきて「ドナー登録者数」も伸び悩んでいます。

私達「勇気の会」は、患者さんとその家族・ボランティア・行政(県・市町)・医師が一緒になって「街頭での啓発活動(献血時・学園祭・地域のお祭りなど)」・「シンポジウムの開催」など様々な活動を通じて30年間、「骨髄ドナー」を募ってきました。

どこかで移植を待ちながら闘病をされている患者さんに、移植のチャンスを与える「勇気の会のボランティア活動」に是非参加してください(特に若い人達をお待ちしています)。

ボランティアのみなさんと(前列左から3人目が南会長)

出典　公益財団法人日本骨髄バンクHP
取材　2018年4月

中川翔子さん

2018年度ACジャパン骨髄バンク支援キャンペーンCMが７月から始まりました。キャッチ・コピーは「生きたいと願う人がいる。」出演は「しょこたん」の愛称でおなじみの歌手・タレントの中川翔子さん。若くして白血病で亡くなられたお父様と同じ年齢を迎え、CM出演となりました。「このCMは父が連れてきてくれたように感じます」と語ります。その思い出とともにお話を伺いました。

後悔していること

骨髄バンクの一番下の登録年齢は18歳ですよね？ すごく後悔していることがあって。父が病気になったのは、私が８歳から９歳の頃です。思い出といえば、家に父が帰ってきてくれたり、幼稚園の運動会やお遊戯の参観日に来てくれたり、誕生日にみんなで一緒に過ごしたり、旅行に行ったり、断片的ですがいろいろある中で、突然白血病になってしまった。死んじゃうかもしれない病気で、骨髄移植をしないと治らない病気だと、しかもドナーと合わないと移植ができないということも祖母や母から聞いて、なのに「怖い、痛いから怖い」と騒いでいたことを覚えています。もしかしたら親子で型が合っていたかもしれないと、ふと思って怖くなることがあります。

母は必死で働きながら、あまり涙を見せないようにしていました。祖父や祖母も憔悴して。私が小さいので、父の髪の毛が抜けている姿をあまり見せないようにしていたようです。入院中は面会回数も少なくて、時が経ってから、ああすればよかった、こうすればよかったと思ってしまうことが多かったですね。

最後に残してくれた自作の絵本

父が一度退院できて家に帰ってきたとき、絵本を必死で描いていたことを覚えています。いつもにこにこして穏やかなイメージの父だったんですが、すごく一生懸

命にベッドの上で描いていました。久しぶりに会った私が照れて、なぞのキノコダンスをしながら部屋に入っていったら、「何をやってるんだ」と言われて。「どうして絵描いてるの？」と聞いたら、「絵は残るからね。いいでしょう、絵本描いてるんだよ」と読み聞かせてくれました。なんでそんなにあわてて描いてるんだろうとしか、当時はわかっていなくて。「そうか、生きた証を残したかったんだ」と、だんだんあとになってわかってきました。

「未知の記憶」という絵本です。自費出版で、のちに復刻版が出ました。

父は絵をよく描いていました。夕暮れの空の絵だったり、猫の絵だったり。その姿が印象的でよく覚えています。それを見て、私も絵を描くのが好きになったというのはとても大きいですね。猫もかわいがっていました。

父がつないでくれたもの

直接父と話せていたことは少ないですが、思春期の頃は、母を悲しませているとしたら、父がいないせいなんじゃないかと、勝手に反抗してこじらせていました。父と同じ職業には就かないし、関係ないと思っていました。でも結局夢をもってデビューしたのが父と同じ芸能界で。性格的にシャイだったので信じられなかったです。

この世界で形になっていったのが、歌うことと絵を描くこと、猫のこと。教えてもらったわけではなかったのに、完全に父の足跡を追っているかのようでした。

初めてのコンサートの場所も、父が歌っていた渋谷公会堂でした。いないけれど存在がすごく感じられることがたくさんあって。いまだにどこに行っても「お父さんと一緒に仕事をしてたんです」と声をかけてもらうことが多くて、共演者やスタッフの皆さんの優しい言葉にハッとさせられます。

父の年齢を超えても、まだそういう不思議なご縁がたくさんあって。趣味で化石を集めてみようかなとパッと思いついたら、父がすでにアンモナイトを集めていたのがそのまま残っていたとか。歌をうたったり、絵を描いたり、猫と一緒にいる中で、もし生きていたらこういうのも好きだったんだろうなあと思ったりします。

ターニングポイントと重なったCM

こうした人との見えない縁を感じる仕事も、ここ10年以上の中でたくさんあって、父と同じ年齢になった今、仕事も生きることもすごく楽しくなりました。やっと慣れてきたところで、いろんな夢が実現したり、また増えてきたりしました。父も、もっと生きたかっただろうなとすごく思います。

父の曲をライブでカバーしたりしましたが、何か言えることできることは何だろうかと思っていました。今回のキャンペーンCMのオファーが誰かの幸せや命に、また未来が変わるきっかけになるとしたら、父と私のいろんな意味での集大成というタイミングになると驚きました。

このCMは偶然どころか、父が連れてきてくれたような気がしました。ずっともやもやしていたことーもし私がドナーになっていたら助けられたのかなと思っていたけど、今後誰かの未来に何か少しでもできることがあったとしたら、間接的な形で、できることがあると気づくきっかけになったので、ありがたいなと思っています。

撮影中は不思議な気持ちでした。遠い未来と考えていた32歳は、がむしゃらに生きていたらあっという間で、父の年齢と並んでしまった年はすごく大きなターニングポイントであり、不思議な縁で、これも意味があったんだろうなと思います。

役者のこと、自分のこと

4月から始まった新しいドラマは、まるであてがきされたような役で、30代女子4人のお話です(NHK総合・金曜22時「デイジー・ラック」)。私の演じる讃岐ミチルは、カバン職人のちょっとこじらせ女子という役で、自分でもすごく共感できることが多くて楽しいです。ほかの共演の3人ともプライベートで遊べるほど仲良しになりました。

プライベートでは、捨て猫を拾って、新居で飼い始めました。この猫が招き猫で、いろんな人が集まるようになったんです。周りと壁がなくなったように感じます。人としゃべるのが怖くなくなりました。もともと人を信じてなかったんですよ。「30代からが面白いよ」といろんな人から聞かされましたが、心の壁がとれたのかもしれません。

患者さんへのメッセージ

ドナーが見つかるというハードルは、高いと考える人が多いかもしれないけど、もっとドナー登録者が増えれば、ドナーが見つかるチャンスは増えると思っています。

父の頃より医療は格段に進歩していると思うので、骨髄バンクと白血病の患者さんにきっと大丈夫と言える未来が近づくようにと、ずっと願っています。父の残してくれた生きた証が、時を超えてこうして誰かの笑顔につながるためになってくれたら、それが何よりだと思います。今回のキャンペーンに限らず、メッセージを伝えることはこれからもしていきたいと思っています。

ドナーさんへのメッセージ

ドナー登録することはとても勇気のいることでもあるし、行動力があるからできることで、ドナー登録によって誰かの未来が救われるかもしれない。そのすばらしいエネルギーはいつも心にとめておいていただきたいと思います。それによって笑顔の花がどこかで咲く。骨髄バンクっていうと、怖いとか痛いんじゃないかとかという、漠然とした認識のある方に、実際に提供した方からお話してくださると全然違うと思うので、周りの方にぜひ一言でも話をしていただければと思います。みんなの思いと行動が、実際に誰かの力になることを実証できるのがドナー登録だと思います。

中川 翔子（なかがわ しょうこ）

1986年東京都中野区生まれ。「しょこたん」の愛称で知られ、歌手、声優、イラストレーター、漫画家、女優として活躍。2004年11月に開始したブログ「しょこたん☆ぶろぐ」が人気を博し、2006 年に歌手デビュー。父の中川勝彦氏（ミュージシャン、俳優）は32歳で白血病で他界。父の影響から、本気で漫画家を目指すほどの画才を発揮するほか、多彩な趣味を持つ。

「神さまのようなドナーさん」

竹内　健人

私は大学１年生の時に急性リンパ性白血病と診断されました。当時は大学進学を機に念願の一人暮らしをしていました。18歳でした。一人暮らしを始めて3か月ほど経った7月頃でしょうか、体調が悪くなりました。症状は咳・熱といったもので、ありふれた症状でした。当時の自分は無知で「風邪薬を飲めば治るだろう」と安易に考えていました。しかし、熱は引いたものの咳がずっと止まらず体調は悪いままでした。加えて大量の汗をかくようになりました。アパートから大学へは徒歩15分程度なのですが、大学の机に汗の水たまりができるほどでした。近所の医院には通院しており、処方された薬は飲んでいましたが、症状は改善されませんでした。８月頃実家に帰省した時に、母が自分の体調を心配して病院に連れていき、そこで血液検査をしました。すると血液データが異常だと分かり、「このまま入院してください」と言われました。最初は訳が分からずに困惑するだけでしたが、次第に状況が呑み込めてきて、ネットで白血病のことを調べたときは「あぁ、おれ死ぬんや」と思ったら涙がボロボロ溢れてきたことを覚えています。

白血病の治療では「寛解」という言葉をよく使います。寛解とは骨髄内の白血病細胞を５%以下に抑えることを言います。寛解に持っていくために大量の抗がん剤を使って治療をします。これが寛解導入療法といって、初めに行われる複数の抗がん剤を組み合わせた強力な化学療法です。この治療で白血病細胞が５%以下になると化学療法だけでの根治も見込めるそうです。しかし、私の場合７%で寛解には至りませんでした。そうなると骨髄移植の適応となります。そこでドナーさんを探すために骨髄バンクに申し込んでいただきました。先生曰く「竹内さんの場合は、出来れば骨髄移植のほうが良い」とのことでした。

先生より23名ドナー適合者がいると伺いました。まずはその中から５名ずつコーディネートが始まります。１か月経った頃には４名の方がコーディネート終了となりました。終了すると別の人とのコーディネートが始まりますが、私の場合は骨髄があまり良い状態ではないらしく、骨髄移植をあまり待てないとのことでした。そして今残ってくださっている１名の方が無事最後まで進めなければ、「他の方が例え提供できても、臍帯血移植に切り替える」とのことでした。ドナーさんを探していただいている間も化学療法は続きます。ドナーさんを待っている間に白血病細

胞を増やさないためです。激しい吐き気や倦怠感など、加えてときには幻覚なんてものもみたりしました。「なんで自分が」「もっと悪い奴はいっぱいおるやろ」こう思う毎日が続きました。

しかし、一人だけ残ったドナーさんが最終同意まで進んでくださり、骨髄を提供してくださいました。私の場合は、初めの５人の中に提供まで進んでくださるドナーさんがいてくれたおかげでした。

移植当日は前処置と呼ばれる超大量の抗がん剤と全身放射線で何も考える余裕がありませんでしたが、骨髄が自分の身体の中に入ってきたときは何となく楽になって力強さを感じたことを覚えています。しかし、私の場合は移植後からが一番大変でした。ドナーさんの骨髄が私の体内で新たに健康な血液を作り出すことを生着と言います。これに私の場合は30日かかってしまったり（通常だと長くても３週間程度で、その病院では過去10年間で自分が初めて）、絶飲食が３か月続いたり、一日中激しい腹痛に襲われたりしていました。毎日が死の瀬戸際で何回か「このまま寝てしまったら一生目覚めないのではないか」と思いながら眠ったことをよく覚えています。それでもなんとか４か月程で症状が落ち着き始めて、5か月半（通常は2か月程度）でやっと退院することが出来ました。

退院後は自宅療養となりました。そこで、これから何をしようかと考えたときに、自分も命を助けてもらった医療の職に就きたいと考え、家から通える理学療法士の専門学校に通い始めました。現在は臨床実習もなんとかクリアし、国家試験に向けて勉強に励んでいます。

移植後は２往復までドナーさんと手紙のやり取りをすることが出来るので、手紙のやり取りをさせていただきました。本当に感謝の気持ちでいっぱいで、今でも読み返すと涙が溢れてしまいます。今自分がこうして元気でいられるのはドナーさんが骨髄を提供してくれたからです。見ず知らずの私のために何の見返りもなく何度も病院へ足を運んだり、家族を説得したりして、更には入院して全身麻酔をしてまで骨髄を提供してくださるのです。ドナーさんは自分にとって神さまのような存在で、本当に感謝し尊敬しています。

自分はたくさんの人に助けてもらって生かされてきました。毎日病室に来て支えになってくれた家族、休みの日でも様子を見に来てくれた主治医の先生、お腹が痛

い時期に毎日さすりに来てくれた看護師さん、辛いときも明るく励ましてくれた理学療法士さん、お見舞いに来てくれた友達。そして何より自分に命をくれたドナーさん。皆さんに本当に感謝しています。自分は運よく神さまのようなドナーさんに巡り合えましたが、すべての患者さんが巡り合えるわけではありません。この冊子を読んでいただいている皆さまがドナー登録を考えるきっかけになってもらえたらとても嬉しいです。

最後に、今も病気と闘っている患者さんに伝えたいことは「後ろめたくなってほしくない」ということです。自分もそうでしたが、何となく後ろめたくて、白血病になったことはあまりおおっぴらに公表したくありませんでした。でも少し前から考えが変わってきて、自分は何も悪いことをしていないのだから堂々しているべきだと思うようになりました。やっぱり、ひたすらに隠していると自分自身がしんどくなってしまうので、周りの人には隠さず、なんでも言って吐き出す方が良いと思います。病は気からなんて言葉がありますが、本当にそうだと思います。自分一人で抱え込まないでほしいと思います。なかなかすぐには元通りというわけにはいかないと思いますが、焦らずにできることをひとつずつやっていってほしいです。

あとは5年生存率とか余命とかインターネットとかでいろいろ見てしまうと思いますが、「そんなもんアテになるかバカヤロー」とでも思ってほしいですね（笑）。

写真中央が竹内さん

あなたのおかげで、私は元気に生きています！　Y.S

私が血液の病気の一つである「骨髄異形成症候群」であると診断されたのは、平成24年の9月、34歳の時でした。職場の健康診断で赤血球と血小板の減少を指摘され、精密検査を受けた結果判明しました。

それまで大きな病気にかかったことがなかった自分にとって、まさに青天の霹靂でした。医師からは「このままだと白血病を発症する可能性が高い」「病気の克服を目指すなら早いうちに骨髄移植を受けるしかない」と言われました。自覚症状も全くなく、現状を受け入れることができなかった私は、精神的にバランスを保つのが難しい日が続きました。

克服のために骨髄移植を目指すことになりましたが、私の兄妹とはＨＬＡが一致せず、骨髄バンクに登録してドナーを探すことになりました。完全に型の一致するドナーは見つかりませんでしたが、１座不一致で提供していただけるドナーの方が幸運にも見つかり、翌年の5月、骨髄移植を受けることになりました。

４月に入院し、移植を受けるための処置を受けました。ドナーさんは北海道の方と聞いていました。移植の日、外の天候を気にしながら北海道から骨髄液が無事に届くよう祈っていたことを覚えています。移植の前後に受けた治療は辛い時もありましたが、主治医の先生や看護師の方々、そして私の家族や友人、同僚の支えのおかげで乗り越え、9月に退院することができました。

その後の経過は、大変ありがたいことに概ね順調で、平成26年4月に職場へ復帰することができました。そして結婚し、１児を授かることができました。今、私は家族に囲まれながら、病気が判明した時には想像もつかなかった幸せな毎日を過ごさせていただいております。これも、私に新しい命を与えてくださったドナーさんのおかげです。

私は、移植を受けて「命」の大切さを深く感じることができました。多くの心配をかけましたが、私が生きていることを心から喜んでくれる人が沢山いることを知りました。毎朝、目が覚めると、心の中で手を合わせ、いま生きていることに感謝しています。命の恩人であるドナーさんへのご恩を忘れたことは、片時もありません。ルール上、ドナーさんのお名前など詳細を知ることはできませんが、移植して間もなく、匿名で手紙を交換することが２回できます。その中でドナーさんが骨髄液提

供後も元気に暮らしておられることが分かり、大変安堵いたしました。また、お手紙でいただいたメッセージにとても励まされました。

お会いすることはできませんが、ドナーさんに私は大きな声で叫びたいと思っています。

「あなたのおかげで、私は今、元気に生きています！本当にありがとうございます。」と。

現在、ドナー登録されている方も年齢により多くの方が「卒業」されていると聞いています。ドナー登録していただける方が増え、生きるチャンスを多くの方に授けていただきたいと思います。

骨髄提供を経験して

三重県赤十字血液センター　川端　光

私は赤十字施設である三重県赤十字血液センターに看護師として働いています。仕事の内容は献血という形でボランティアの皆様から貴重な血液を採血させていただいております。献血会場でボランティアとして活動している勇気の会を通じて骨髄バンクを知り、私で良ければと登録をしました。

私自身は看護師であり、骨髄採取の安全性も理解していましたので、登録と同時に家族にも説明をして了解を得ました。

登録後10年ほど経過して私のところにドナーの適合通知が届きました。その時、私は「やっと来た。誰か一人の命が助かるかもしれない。それってすごいことだ」と思いました。職場では、「献血はいつでもできるけど骨髄提供はなかなかできることではないので役に立つことが出来てよかったね。」と言っていただき、気持ちよく送り出していただきました。

さて、骨髄提供までには何度か病院に行き、コーディネーターからの説明、事前の検査等を受けました。自分では健康であると自負していましたが、血液検査の結果は心配したもののクリアして、いよいよ骨髄採取の日も決まってきました。骨髄採取までの間に自己血を２回採取しましたが、そのころから自分自身の健康を意識し始めました。病気やけがは絶対にしてはいけない。交通事故に巻き込まれないよう交差点では常に気を付けていました。患者さんが骨髄移植を受けるための処置を開始し始め、自分自身に何かあっては迷惑をかけるどころか命にかかわると思い、早く骨髄採取の日が来ないか待ち遠しく思いました。無事に骨髄の提供が終了して麻酔から目が覚めた時には、無事提供ができ、役割を果たせたという安心感と同時に、患者さんはこれからの治療が大変で、どうか元気になっていただきたいという気持ちでいっぱいになりました。そして、自分自身も健康の大切さを身に染みて感じることができました。麻酔が切れて痛みは少しありましたが、仕事や日常生活に支障はない程度でいつの間にか痛みも感じなくなっていました。また、機会があれば骨髄提供をしてもよいと思っていましたが、残念ながら、骨髄提供はできない年齢となりました。今まで多くのボランティアの方に支えられて仕事をしてきましたが、その中でも骨髄提供を経験して人間の命の大切さや健康について勉強させていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

同種造血幹細胞移植のいま

三重大学医学部附属病院血液内科医師　藤枝　敦史

平成17年発行の「いのちの贈りもの」では影山慎一先生が、三重県で同種造血幹細胞移植が開始された1984年当時の様子を寄稿されておりました。1984年といいますと私はまだ小学生です。現在でこそがん免疫療法の開発で本庶佑先生がノーベル医学生理学賞を受賞し、同種造血幹細胞移植のより洗練された姿と考えられる免疫細胞治療も実用化が進んでおりますが、当時の医療水準を思えば同種造血幹細胞移植がいかに時代を超越した困難な治療法であったかが偲ばれます。

困難な治療に臨んだ患者さん、身を呈して協力いただいたドナーさん、新たな治療を切り開いてきた先達に最大の敬意を表しながら、私が同種造血幹細胞移植に本格的に関わるようになった2000年代前半からの同種造血幹細胞移植の進歩について書いてみたいと思います。

私が大学を卒業した1997年は、同種造血幹細胞移植の適応を飛躍的に拡大することとなった強度減弱前処置（Reduced Intensity Conditioning, RIC）での同種造血幹細胞移植が初めて報告された年でした。これは同種造血幹細胞移植療法の本質を免疫細胞治療と捉える、今では主流ともいうべき移植方法です。RICの開発は55歳以上の高齢の患者さんへの同種造血幹細胞移植の適応拡大を可能としました。1997年当時ほとんど行われていなかった50歳以上の患者さんへの同種造血幹細胞移植が、現在では半数を占めるようになったことを考えると、まさにパラダイムシフトともいうべき出来事であったと思います。

移植前処置の多様化とともに2000年代前半以降、もう一つ多様化が進んだのは同種移植に用いる幹細胞源です。骨髄バンクでは2010年に末梢血幹細胞採取が認可され、造血幹細胞を提供いただく方法の選択肢が増えました。また、成人患者さんに臍帯血移植が盛んに行われるようになったのも2000年代に入ってからでした。東京大学医科学研究所と虎ノ門病院からの優れた治療成績の発表を契機として成人への臍帯血移植が急速に拡大し、臍帯血移植は骨髄バンクを介した同種造血幹細胞移植と同数にまで増加することとなりました。さらに、ここ数年で急速に増加しているのは血縁者からのHLA半合致移植です。従来、2座以上のHLA不適合ドナーからの移植は重症の急性GVHDが発症するためタブーとされてきましたが、移植後に

シクロホスファミドの大量投与を行って、重症のGVHDを引き起こすTリンパ球クローンを選択的に消滅させることで安全に血縁者からのHLA不適合移植を実施できることが報告され、とくに海外では臍帯血移植を凌駕する勢いで実施数が伸びています。

骨髄バンクに関連してお話しを続けますと、現在、HLA型の検査は従来の血清型検査にかわってDNAタイピングでのより詳細な検査が実施されています。全国的な移植成績のデータベース構築が充実したことで、DNAタイピングでの詳細なHLA適合度が移植成績に及ぼす影響が明らかになってきました。従来の血清型でのHLA適合検査ではHLA適合と考えて実施されていた移植の中でも、DNAタイピングで詳細な適合判断を行うと不適合の組み合わせがあり、DNAタイピングでの特定のHLA不適合の組み合わせでは重症のGVHD発症割合が高く、移植成績の悪化につながることが明らかとなってきました。骨髄バンク発足時、30万人のドナー登録が実現できればほとんどの患者さんがHLA適合ドナーさんを見つけられると考えられていました。現在、骨髄バンクのドナー登録者数は49万人に達しておりますが、以前よりも厳密なHLA適合判断を行うことで移植の安全性が向上した反面、設立時のドナー登録者数の目標を大きく超えた現在の骨髄バンクであってもドナーさんを見つけられないケースもあります。

前号の「いのちの贈りもの」の影山先生の原稿を引き継ぐ形で私の知る最近20年の同種造血幹細胞移植の変化について綴ってみました。この20年、同種造血幹細胞移植の安全性は飛躍的に向上し、より多くの患者さんがこの治療によって難病を克服されるようになりましたが、同時に移植の力をもってしてもなお乗り越えられない難病の壁も実感されるようになりました。患者さんはもちろん、造血幹細胞ドナーさんをはじめ、移植医療を支えていただいている方々のご期待に応えられるよう、よりよい移植医療の実現のためこれからも精進を続ける所存ですが、次号の「いのちの贈りもの」でこの文章を引き継いでくれる医師が、新たな扉の向こうを描いてくれることを願って拙文のまとめといたしたいと思います。

わたしにとってのボランティア活動

藪内　紀子

勇気の会の活動を始めてもうすぐ４年になります。夫の友人が骨髄移植の経験者であり、夫が勇気の会に参加していたことがきっかけで一緒に参加するようになりました。勇気の会がどのような活動をしているのかもわからずに参加し始めましたが、みなさんに温かく受け入れてもらい、地域のお祭りやショッピングモールでの献血の際のドナー登録の呼びかけのお手伝いをさせてもらったり、定期的な会合や食事会を通してたくさんの仲間ができ、今では楽しくボランティア活動をさせてもらっています。

わたしは看護師という職業柄、白血病や骨髄移植に関するそれなりの知識はありましたが、実際に病気を体験された患者さんや家族の方のお話はとても貴重で、初めて知ることもたくさんありました。これだけ医学が発達し、さまざまな病気を治す薬や技術、機材が進歩してきている現在でも、移植医療だけはドナーがいないと成り立たない。移植をするにはたくさんのドナーが必要…。自分の少しの勇気と周囲の理解で救える命があるということを知ることができました。

わたし自身もドナー登録させていただき、ドナーになれる健康な体を持っていることのありがたさと、自分にも救える命があるということ、このことを一人でも多くの人に知っていただくお手伝いができたらと思い、勇気の会の活動に参加しています。わたしもそうでしたが、ボランティア活動に興味のある方、興味はあるけどどうしたら参加できるのかわからない方もたくさんみえると思います。

ボランティア活動を通じて、たくさんの人とのつながりができ、自分自身を成長させてもらえ、勇気の会に参加してよかったと思っています。たくさんの方に気軽に勇気の会のドアをたたいていただけるよう、わたし達ももっと工夫と努力を重ね、たくさんの方の笑顔をつないでいけたらいいなと思います。

写真左が藪内さん　写真右が小出さん

自分にできる、小さなことから。一緒にボランティア活動をしてみませんか？

「勇気の会」での活動

小出　奏穂

たくさんボランティア活動をしている中の一つに、「勇気の会」の活動があります。きっかけは、職場にその会で活躍されている方がみえたからです。私は介護支援専門員をしており、過去に再生不良性貧血の方の担当をさせていただいたことがあり、少しはその時に勉強しましたが、骨髄バンクのことはあまり知りませんでした。何気なくボランティアを始めて、自分も骨髄バンクの登録くらいはできるだろうと思っていましたが、ある薬を飲んでいることから、登録ができないことを知りました。健康な身体でないと登録ができないことを知った時、それなら、骨髄バンクを知ってもらうきっかけ作りのボランティアができれば、そして知ってもらい、登録をしてもらえる人が増えたらうれしいなあと思い活動をしています。

勇気の会の活動の中で、実際に骨髄移植をされた方の話を聞かせていただいたことや、なかなか登録者が増えない現実を理由も含め知ることができました。また、活動の中で、友人が骨髄バンクのことを正しく理解していないことも知りました。その友人にはしっかりと説明し、正しく理解していただき、納得し、骨髄バンクの登録をしていただきました。木下ほうか氏の著書「僕が骨髄提供をした理由」を読ませていただき、実際に彼の講演を聞き、「とりあえず骨髄バンクに登録をしてほしい。高いハードルのものではない。」と語られていたのが印象的でした。

健康な方にはぜひ骨髄バンクへの登録を考えていただけたらと思います。そして、一人でも多くの命を救うことができたらと思います。私よりも若い世代の人たちにどのように伝えていけばよいのか、どのような活動をすれば正しい知識をもってもらうことができるのか、これからの課題もたくさんありますが、まずは、私たちと一緒に活動してくださる人を一人でも多く作りたいと思います。皆さん一緒に活動しませんか？

骨髄・末梢血幹細胞提供までの流れ

1. ドナー候補者になったら

患者さんとHLAが適合すると、ドナー候補者として選ばれたことが日本骨髄バンクから伝えられます。ご本人の意思とご家族の意向、健康状態や日程などについてのアンケートに回答してください。なお、その時の健康状態などにより提供できない場合もあります。

2. コーディネートと確認検査

ドナー候補者との連絡調整を行うコーディネーターが確認検査の日程調整をします。確認検査当日、本人確認のための書類(運転免許証等)提示をお願いします。確認検査では、コーディネーターが面談して骨髄および末梢血幹細胞提供に関しての詳しい説明を行い、医師が医学的な説明と問診をします。また、骨髄および末梢血幹細胞採取のうち、ドナー候補者が承諾しない方法があるか確認します。提供の意思に変わりがない場合は、健康状態などを確認するための採血をします。

3. 大切な約束、最終同意

ドナーに選ばれると、コーディネーターと医師が、立会人同席のもとドナー候補者とご家族の最終的な提供意思を確認します(最終同意)。最終同意書への署名は大切な約束です。最終同意の後は、患者さんの命にかかわるため提供意思の撤回はできません。同意後、提供日と病院の調整をします。

4. 健康診断

骨髄・末梢血幹細胞提供の約1か月前に、採取病院(日本骨髄バンクが認定した病院)で医師による詳しい健康診断が行われ、安全な採取に備えます。事前にドナー手帳が配られます。

骨髄提供の場合

5. 自己血輸血のための採血

採取後の貧血を軽減するため、血液を事前に採血しておきます。この血液は提供日の１～３週間前に必要に応じて採取して保存します。

6. 骨髄採取

通常３泊４日の入院をすることになります。ドナーは提供の１～２日前に入院し、健康チェックと説明を受けます。

末梢血幹細胞提供の場合

5. 白血球を増やす薬（G-CSF）を注射

3～4日の通院または入院でG-CSFを注射すると、末梢血中に造血幹細胞が流れ出します。

6. 末梢血幹細胞採取

G-CSFを注射した４または５日目に採取します。注射を通院で行う場合も、採取の際は通常1～2日の入院をします。採取した細胞数が不十分な場合は、翌日2回目の採取をします。

7. 骨髄・末梢血幹細胞が患者さんのもとへ

採取された骨髄・末梢血幹細胞は、患者さんの待つ病院に運ばれて移植されます。

8. 採取後、数日内で退院（※）

採取後は数日内で退院し、日常生活に戻ることができます。退院後は定期的にコーディネーターが電話で健康状態を確認し、また１～４週間後に健康診断を行うなど、ドナーの健康状態を体調が回復するまでフォローアップします。

※ 採取方法によって異なります。

参考資料 公益財団法人日本骨髄バンク ドナー登録のしおり「チャンス」

骨髄バンクドナー登録について

■ドナー登録ができる方

●骨髄・末梢血幹細胞の提供の内容を十分に理解している方
●年齢が18歳以上、54歳以下で健康な方
●体重が男性45 kg以上／女性40 kg以上の方

ただし、

※骨髄・末梢血幹細胞を提供できる年齢は、20歳以上、55歳以下です。
＊適合検索が開始されるのは20歳からです。
＊コーディネートの対象とならなかった方は、満55歳の誕生日で登録取り消しとなります。

※ドナー登録後の健康状態によっては、コーディネートを進めることができないこともあります。

※骨髄・末梢血幹細胞の提供にあたっては、家族の同意が必要です。

※腰の手術を受けたことがある方は、骨髄提供はできません。

■ドナー登録をご遠慮いただく方

（1）病気療養中または服薬中の方特に気管支ぜんそく、肝臓病、腎臓病、糖尿病など、慢性疾患の方
（2）悪性腫瘍（がん）、膠原病（慢性関節リウマチなど）、自己免疫疾患、先天性心疾患、心筋梗塞、狭心症、脳卒中の病歴がある方
（3）悪性高熱症の場合は、本人またはご家族に病歴がある方
（4）最高血圧が151 mmHg以上または89mmHg以下の方、最低血圧が101 mmHg以上の方
（5）輸血を受けたことがある方、貧血の方、血液の病気の方
（6）ウイルス性肝炎、エイズ、梅毒、マラリアなどの感染症の病気の方
（7）食事や薬で呼吸困難の症状が出たことがある方や、高度の発疹の既往がある方
（8）過度の肥満の方（体重 kg÷身長 m÷身長 mが30以上の方）

参考資料 公益財団法人日本骨髄バンク ドナー登録のしおり「チャンス」

Q. 骨髄採取・末梢血幹細胞採取はどのように行われるのですか。

A. 骨髄採取：骨髄は骨盤を形成する大きな腰の骨（腸骨といいます）から注射器で採取します。手術室でうつ伏せになった状態で、骨盤の背中側、ウエストの位置より少し下の腸骨に、専用の針を左右数十カ所刺して吸引します。所要時間は１～３時間です。骨髄採取の麻酔方法は、原則として全身麻酔で行われます。

末梢血幹細胞採取：末梢血（全身を流れる血液）には、通常、造血幹細胞はほとんど存在しませんが、白血球を増やす薬（G-CSF）を注射すると、末梢血中にも流れ出します。採取前の３～４日間、連日注射し造血幹細胞が増えたところで、血液成分を分離する機器を使い造血幹細胞を採取します。

Q. どのくらいの骨髄・末梢血幹細胞を採取するのですか。

A. 骨髄移植：骨髄移植で採取する骨髄の量（出血量）は、適合した患者さんの体重によって異なります。小児の場合200 mLで済むこともありますし、大人では1,000 mLを超えることもありますが、ドナーの体重に応じて、安全な範囲が定められています。健常成人では、日々、骨髄で赤血球が2,000億個、白血球と血小板が1,000億個生産されており、出血（骨髄採取≒出血）した場合などはその生産量が調整されて増加します。骨髄は採取後すみやかに元の状態に戻りますし、その間、日常生活に支障はありません。

末梢血幹細胞移植：末梢血幹細胞移植では採取１回で、専用の機械（血液成分分離装置）に循環させる血液の量は、ドナーの体重1kgあたり200mLを目標とし、250 mLを上限とします。この量は、ドナーの負担にならないように設定されています。実際の採血量は、約100～300mL程度です。機械の中では、血液中から移植に必要な細胞（造血幹細胞）を遠心分離器を使って取り出し、それ以外の血液はドナーの体に戻されます。

Q. 骨髄にするか、末梢血幹細胞にするかは誰が決めるのですか。

A. ドナーには、確認検査時に骨髄提供、末梢血幹細胞提供の両方法について説明します。承諾できない方法があれば、その時に伺い、これを患者さん側にお伝えします。ドナーの意思を踏まえて、最終的に患者さん側が決定します。

Q. さい(臍)帯血移植とは何ですか。

A. 母親と胎児を結ぶさい帯と、胎盤の中に含まれる血液をさい帯血といいます。さい帯血は通常、出産後に不要となりますが、血液細胞を造り出す基である「造血幹細胞」がたくさん含まれているので、これを患者さんに移植することによって、骨髄移植・末梢血幹細胞移植と同様の効果を得ることができます。

Q. HLA型が一致するのは非血縁者間では数百から数万人に1人とありますが、数百から数万と差が開くのはなぜですか。

A. 一致する差の大きさは、HLA型の出現頻度の差です。HLAの型は数万から数十万種類ありますが、日本人の型として珍しい型だと一致する確率が低くなります。逆に比較的よくある型だと、一致する確率も高くなります。

Q. ドナー候補者になると、最初の連絡はどのような方法で来るのですか。

A. 患者さんとHLAが適合すると、日本骨髄バンクから「ドナーコーディネートのお知らせ」「問診票」や「ドナーのためのハンドブック」などの関係書類が入った大型の封筒が送られてきます。コーディネートの進行に問題がないことが確認されると、担当地区事務局のコーディネーターから電話があり、提供についての詳しい説明と「確認検査」のため、日本骨髄バンクが指定する施設を訪れる日程を調整します。ドナー登録から候補者の一人として連絡があるまでの期間は、人によってさまざまであり、登録してすぐに連絡がある方もいれば、10年以上経ってから連絡がある方もおられます。

Q. 最終同意を撤回することはできますか。

A. 最終同意後、患者さんは移植に備え、化学療法や放射線療法によって造血機能を失います。この段階で骨髄移植や末梢血幹細胞移植を受けられなくなってしまうと、患者さんにとって致命的となりますので、最終同意後の意思の撤回はできません。

Q. 提供にあたって、費用はかかりますか。

A. 骨髄・末梢血幹細胞提供のための検査費用、入院費は一切かかりません。ただし、ドナー登録手続きの際の交通費は自己負担となります。

Q. 提供時の休業補償などはありますか。

A. 善意にもとづく骨髄・末梢血幹細胞の提供ですので、登録や提供の際に仕事を休まれても、休業補償はありません。なお、官公庁や一部の企業などでは「ドナー特別休暇制度」を、一部の自治体では骨髄等を提供した住民やその雇用事業者に対して奨励金を交付する「ドナー助成制度」を導入しています。

Q. 採取後、すぐに仕事に復帰できますか。

A. 採取後は通常１～２日間入院し、安静に過ごしていただきます。通常は退院後から普通の生活に戻れますし、復職・復学が可能です。

Q. ドナーが患者さんと面会することはできますか。

A. 骨髄バンクの公平な運営と、相互のプライバシー保護のため、面会は認められません。ただし、個人が特定されない範囲であれば、公益財団法人日本骨髄バンクを通じて骨髄・末梢血幹細胞の提供後、１年以内に２回まで手紙の交換が可能です。

Q. 三重県のドナー登録の状況はどうなっていますか。

A. 平成30年12月末日現在、全国のドナー登録者数は493,627名、三重県のドナー登録者数は4,552名となっています。三重県では、平成27年度、28年度、29年度の登録取消者数が新規登録者数を上回り、ドナー登録者が3年連続して減少している状況にあり、ドナー登録者の確保が必要な状況にあります。

全国では1,347名が、三重県では15名の患者さんが移植を待っています。

これまで、非血縁者間において、全国の累計で22,704件、そのうち、三重県に居住されていた方の累計で307名の方に移植が実施されています。

参考資料 公益財団法人日本骨髄バンクHP

三重県骨髄バンク推進連絡協議会（勇気の会）

三重県骨髄バンク推進連絡協議会（勇気の会）は、骨髄提供希望者（ドナー）、骨髄移植を必要とする患者さんやその家族、または骨髄移植医などの医療関係者、成分献血登録者、骨髄バンクを支援する本会の目的に賛同する者が集まって、県、市町、三重県骨髄データセンターと連携し、次のような活動を行っています。

1）骨髄バンクを多くの方に理解してもらうため、パンフレットの配布、シンポジウムの企画開催などを行っています

2）骨髄移植を受ける患者さんにとって、まさに「いのちの贈りもの」ともいえるHLA適合血小板の登録を呼びかけています

3）専門医や経験者が、患者さんやその家族、骨髄移植提供希望者からの不安に対する相談を受け付けています

4）会報「いのち」を発行して、骨髄バンクや成分献血に関する情報を提供しています

正会員会費は一口1,000円となっています。その他、賛助会員、法人会員についても随時募集しております。

一緒に白血病など血液の難病と闘う患者さんのために活動しませんか。

事務局

〒514-0002 津市島崎町314 島崎会館1階 三重県食肉生活衛生同業組合内

TEL・FAX 059-226-8406

ホームページ https://inochimie.jimdo.com/

各地域支部（桑員・四日市・松阪・伊勢志摩・伊賀・紀州）

＊このマークは
伊勢ライオンズクラブから
寄贈いただいたものです。

三重県骨髄バンク推進連絡協議会（勇気の会）の活動経過

昭和63年	12月	三重県骨髄献血希望者を募る会が発足
平成元年	5月	三重県骨髄献血希望者を募る会が県内初のシンポジウム開催
	12月	東海骨髄バンクの設立に伴い、三重県骨髄献血希望者を募る会もその運営等に参画
平成２年	6月	全国骨髄バンク推進連絡協議会の新組織に三重県骨髄献血希望者を募る会が参加
	7月	シンポジウム（津）開催
平成４年	6月	三重県骨髄献血希望者を募る会が「勇気の会（三重県骨髄バンク推進連絡会議）」に組織変更
	9月	三重県骨髄バンク推進協議会が発足
	10月	県内初の官民共催のシンポジウムを開催（津）
平成５年	2月	紀州支部・四日市支部設立
	4月	「いのちの贈り物」発行
		県職員について、骨髄バンクドナー登録・検査・骨髄採取等の期間が職務専念義務免除扱いに
	6月	桑員支部設立
平成７年	1月	骨髄提供希望者登録推進事業を四日市、伊勢両保健所において開始
平成８年	4月	骨髄提供希望者登録推進事業を上野保健所において開始
	5月	伊勢志摩支部設立
平成９年	4月	骨髄提供希望者登録推進事業を熊野保健所において開始
		上野支部（現在の伊賀支部）設立
平成10年	4月	骨髄提供希望者登録推進事業を桑名、鈴鹿、松阪、紀北各保健福祉部（保健所）で開始
		各保健福祉部での骨髄バンクドナー登録受付が可能となる（津は骨髄データセンターで受付）
平成11年	6月	勇気の会結成10周年シンポジウムを開催（津総合文化センター）
平成12年	3月	三重県骨髄バンク推進協議会の廃止
	12月	「骨髄バンクを応援する三重県の議員連盟の会」発足
平成13年	4月	FM三重「骨髄バンクインフォメーション」開始
平成14年	7月	勇気の会総会において会費制正会員制の組織に規約を変更
平成15年	4月	献血ルーム「サンセリテ」（四日市）で骨髄バンクドナー登録開始
平成17年	4月	献血ルーム「ハート・ワン」（山田赤十字病院内）で骨髄バンクドナー登録開始
	5月	全国骨髄バンクボランティアの集いを伊賀市において開催
平成20年	1月	三重県がん相談支援センター設立、「がん患者と家族の方のおしゃべりサロン(※)」開設
平成21年	1月	「勇気の会」設立20周年記念イベントを開催
平成25年	4月	県内で初めて、名張市が骨髄の提供者と提供者の勤務先に助成金を交付する要綱を施行
平成27年	4月	全国骨髄バンク推進連絡協議会設立25周年記念事業・日本縦断キャラバンが沖縄県をスタート
	5月	日本縦断キャラバンが骨髄提供者とともに三重県庁と三重県赤十字血液センターを表敬訪問
平成28年	6月	勇気の会を「三重県骨髄バンク推進連絡協議会（勇気の会）」に組織変更
平成31年	2月	「三重県骨髄提供の環境向上委員会」設立

※「がん患者と家族の方のおしゃべりサロン」を、三重県津庁舎で毎月第2木曜日に開設しています。
このほか、随時、桑名・四日市・鈴鹿・伊勢・伊賀及び東紀州においても開設しておりますので、日程等は三重県がん相談支援センター（TEL 059-223-1616）にお問い合わせください。

みなさまの献血が医療を支えています

【献血とは】

献血とは病気の治療や手術などで輸血を必要としている患者さんのために健康な人が自らの血液を無償で提供するボランティアです。

病気やけがの治療のために、日本国内では毎日約3,000人もの患者さんが輸血を受けているといわれていますが、輸血に使用する血液はまだ人工的に造れず、長期間の保存もできません。

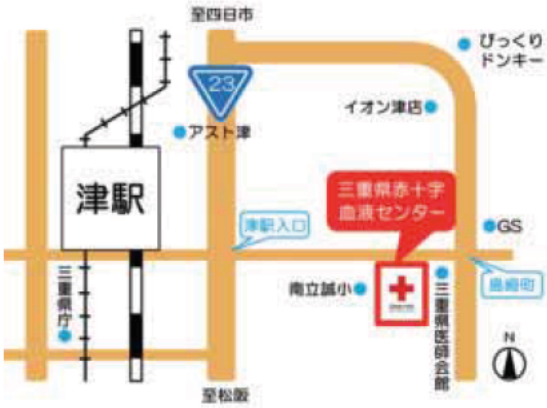
近年では、少子高齢化の影響などによって、10代から30代の若年層協力者が全国的にも減少しており、血液の安定供給に支障をきたす恐れもあります。今後も患者さんに輸血用血液を安定的に届けるために、今まで以上に若い世代をはじめ、幅広いみなさまのご理解と継続的な献血へのご協力をお待ちしております。

【採血基準】

	全血献血		成分献血	
種　類	400mL	200mL	血小板	血漿
1回の献血量	400mL	200mL	600mL以下	600mL以下 (循環血流量の12%以内)
年 齢（※）	男性17～69歳 女性18～69歳	16歳～69歳	男性18～69歳 女性18～54歳	18歳～69歳
体　重	50kg以上	男性45kg以上 女性40kg以上	男性45kg以上 女性40kg以上	
血色素量	男性13.0g/dL以上 女性12.5g/dL以上	男性12.5g/dL以上 女性12.0g/dL以上	12.0g/dL以上	12.0g/dL以上 (赤血球指数が標準域にある女性は11.5g/dL以上)
年間献血回数	男性3回以内 女性2回以内	男性6回以内 女性4回以内	血小板成分献血1回を2回分に換算して血漿成分献血と合計で24回以内	
年間総献血量	400mL献血と200mL献血を合わせて 男性1,200mL以内 女性800mL以内		–	–

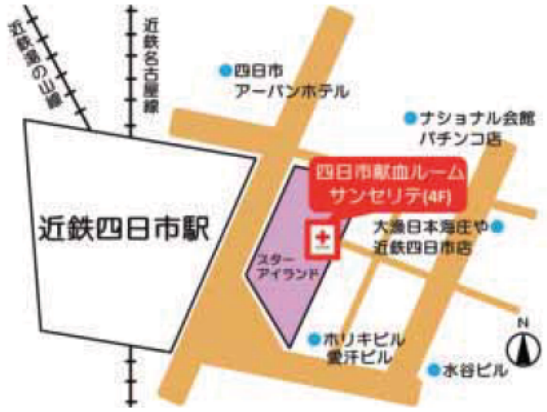
※ 65歳から69歳までの方は、60歳から64歳までに献血の経験がある方に限られます。

【三重県内の献血ルームのご案内】



三重県赤十字血液センター

〒514-0003 津市桜橋2丁目191番地
【電話】059-229-3582
【受付時間】
全血 9:00～11:45/13:00～16:30
成分 9:00～11:00/13:00～16:00
【定休日】土曜、年末年始



献血ルーム サンセリテ

〒510-0086 四日市市諏訪栄町6番地4号
近鉄四日市駅前「スターアイランド」4階
【電話】059-355-5863
【受付時間】
全血 10:00～11:45/13:00～17:30
成分 10:00～11:00/13:00～17:00
【定休日】火曜、年末年始

献血ルーム ハートワン

〒516-0008伊勢市船江1丁目471-1
ショッピングセンター「ミタス伊勢」内
【電話】0596-25-7821
【受付時間】
全血 10:00～11:45/13:00～17:30
成分 10:00～11:00/13:00～17:00
【定休日】金曜、年末年始

【献血についてのお問い合わせ先】

三重県内の献血ルームの詳細や、献血バスの配車予定・各種イベント・キャンペーンなど、献血に関する情報については、三重県赤十字血液センターのウェブサイトをご覧ください。 **https://www.bs.jrc.or.jp/tkhr/mie/index.html**

三重県　献血　検索

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society 三重県赤十字血液センター

LINE@

公益財団法人日本骨髄バンクのあゆみ

1991年	12月	財団法人骨髄移植推進財団設立（18日）
1992年	1月	日本赤十字社「骨髄データセンター」設置
		ドナー登録の受付開始
	6月	患者登録の受付開始
	9月	コーディネート開始
1993年	1月	日本骨髄バンクによる初の骨髄移植を実施（28日）
1994年	10月	全国の保健所でドナー登録受付を開始
1997年	1月	日本骨髄バンクによる骨髄移植1000例（29日）
	4月	ドナー登録時に1次、2次検査（HLA-A座、B座、DR座検査）を同時実施
		日本骨髄バンクとNMDP（米国骨髄バンク）が提携（国際ドナー検索契約）
		TCMDR（台湾骨髄バンク）とも試験的提携を開始
	9月	国際協力による骨髄移植第1例の実施（NMDPから）
1998年	4月	BMDW（世界骨髄バンクHLA型種類別データ集計システム）に参加HLA照合サービス開始
	6月	TCMDR（台湾骨髄バンク）から初の骨髄提供
	8月	ドナー登録者数10万人到達（13日）
	10月	韓国に骨髄提供第1例
1999年	1月	HLA一部不適合移植、年齢拡大など移植希望患者の適応拡大
	5月	KMDP（韓国骨髄バンク）と仮提携締結による相互検索サービスを開始
	10月	東海村での被爆事故患者への緊急コーディネート開始
2000年	3月	KMDPから初の骨髄提供
	5月	NMDPと提携後、初の骨髄提供
	6月	厚生省「骨髄提供希望者確保事業」実施要綱の改正通知（ドナー登録会の実施要綱改訂）
2001年	1月	コーディネートのコンピューターシステム本格稼動
	8月	移動献血会場でのドナー登録受付、全国展開へ
	9月	米国同時多発テロにより、NMDPからの骨髄搬送にチャーター機利用
2002年	4月	患者救済に資する事業募金を開始
2003年	8月	日本骨髄バンクによる骨髄移植5000例（1日）
2004年	11月	ドナー登録者数20万人到達（25日）
2005年	3月	ドナー登録要件緩和（下限18歳以上、登録時の家族の同意不要など）
	9月	ドナー登録要件の上限年齢が「登録54歳まで・提供55歳まで」に引き上げ
2008年	1月	ドナー登録者数30万人到達（15日）
	12月	日本骨髄バンクによる骨髄移植10000例（3日）
2009年	8月	ドナー登録時にHLA-C座検査開始（1日）
2010年	10月	末梢血幹細胞移植（PBSCT）を導入（1日）
2011年	1月	新規ドナー登録者に末梢血幹細胞移植（PBSCT）の説明開始（1日）
	3月	日本骨髄バンクにおける１例目の末梢血幹細胞移植実施
	12月	日本骨髄バンク設立20周年記念全国大会開催（17日）
2012年	4月	公益財団法人骨髄移植推進財団に移行登記（1日）
	12月	日本骨髄バンクによる骨髄・末梢血幹細胞移植15000例（12日）
2013年	10月	公益財団法人日本骨髄バンクに名称変更（1日）
2014年	4月	厚生労働大臣よりあっせん事業者として許可される（1日）
2016年	9月	日本骨髄バンク設立25周年記念全国大会開催（17日）
	10月	日本骨髄バンクによる骨髄・末梢血幹細胞移植20000例（19日）
2018年	7月	日本骨髄バンクによる末梢血幹細胞移植500例到達

（出典 公益財団法人日本骨髄バンクHP）

ドナー登録窓口・お問い合わせ先

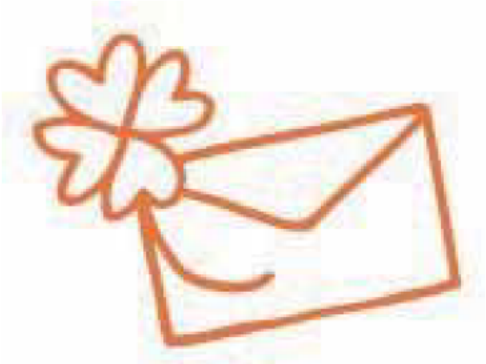
ドナー登録を希望される方は、下記の登録窓口へお越しください。
受付時間は、窓口に直接お問い合わせください。

施設名	電話番号	登録受付日
三重県医療保健部薬務感染症対策課	059-224-2330	―
三重県桑名保健所	0594-24-3623	毎週火曜日
三重県鈴鹿保健所	059-382-8674	第2水曜日
三重県津保健所	059-223-5112	―
三重県松阪保健所	0598-50-0529	第1・3火曜日
三重県伊勢保健所	0596-27-5151	―
三重県伊賀保健所	0595-24-8080	第2木曜日
三重県尾鷲保健所	0597-23-3461	第1木曜日
三重県熊野保健所	0597-85-2159	第4火曜日
三重県赤十字血液センター(津)	059-229-3588	土曜日以外
献血ルーム「サンセリテ」(四日市)	059-355-5863	火曜日以外
献血ルーム「ハートワン」(伊勢)	0596-25-7821	金曜日以外

各保健所が実施する献血街頭ページェントの際に、献血バス併行型のドナー登録会を実施しています。詳しくは各保健所にお問い合わせください。

本冊子の発行については、「骨髄バンクの普及啓発用チラシ等作成のためのクラウドファンディング」(平成30年度)により募集した寄附金を用いて作成をさせていただきました。みなさまの温かいお気持ちに、この場をお借りし感謝申し上げます。

三重県医療保健部薬務感染症対策課
〒514-8570 三重県津市広明町13番地
TEL 059-224-2330
FAX 059-224-2344



2019年3月

三重県

© Japan Marrow Donor Program. All Rights Reserved.